えど友ホームページ
https://www.edo-tomo.jp/

えど友 EDO-TOMO

第124号
令和4年
(2022)
1－2

江戸東京博物館友の会会報

目次

江戸の数学 ……1～2
新年祝辞　江戸博藤森館長・友の会待場会長／
　休館対応プロジェクトからのお知らせ ……3
えど友広小路
　サークルだより／翻刻だより／友の会めも ……4
見学会「定番・江戸城周辺探訪―その５(外濠)―」……5
友の会セミナー
　「長谷川雪旦～『江戸名所図会』を描いた絵師」……6
友の会セミナー
　「『名所江戸百景』考―百万都市に向けた眼差し―」…7
見学会
　「再訪 広重『名所江戸百景』周辺探訪―その２」……8
特別展「縄文 2021―東京に生きた縄文人―」観覧記…9
江戸博クリップ「初めてのミュージアムトーク」……9
江戸名所図会を歩く…㊽［飛鳥山から瀧不動尊］……10
催事案内 ……11～12

江戸の数学

江戸時代、多くの庶民が実用的なそろばんを中心とした算術（数学）を学び、都市部だけでなく農村部にも数学の塾がありました。また、世界の先端を行く数学者も輩出しました。このようなことは世界に類がないと思います。江戸の数学の一端をご紹介します。

『塵劫記』の出版

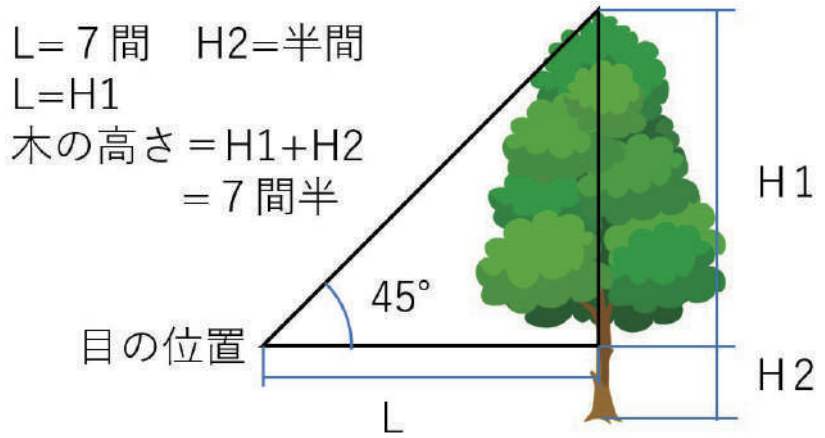
算術の教科書として広く普及した『塵劫記』は、京都の吉田光由によって寛永４年(1627)に初版が出版されました。『塵劫記』では、イラストを用い、そろばんの使い方、命数法や単位、掛け算九九などの基礎的な知識のほか、面積、両替や利息計算などの実用的な計算、平方根・立方根の求め方など少し専門的なものも書かれています。初版から大変な人気になり、解説本や海賊版が多数出版され、『塵劫記』と名の付く本は、300年で400タイトルになったといわれています。それらに対抗するためもあって、同６年、『塵劫記』を５巻本として改訂刊行。同８年には２色刷で３巻本に、同11年には４巻本として刊行され、これが最も普及しました。同18年には『新編塵劫記』として、巻末に解答を付けない問題を12問掲載して刊行(遺題本)しました。この問題を解いた者が、解答と新たに自分が考えた遺題(問題)を本にして出版するということが次々に行われるようになりました。これを遺題継承といい、和算の発展に多大な貢献をしました。

▲画像１『新編塵劫記　３巻』
（京都大学附属図書館所蔵）部分

『新編塵劫記』の一部内容の紹介

「第一巻第十　米うりかひの事」の最初の問題は、「米が810石あります。銀10匁あたり米４斗３升２合の相場とするとき、この米の値段は銀でいくらになりますか。答えは18貫750匁」、単位が分かれば簡単な問題です(参考：１石＝10斗、１斗＝10升、１升＝10合、銀は重さで数えられ１貫＝1000匁)。掲載されている問題はだんだんと難しくなっていきます。

「第三巻第三　たち木の間



▲画像２　木の高さを測る方法の説明

をつもる事」(画像１)では、直角二等辺三角形の性質を使って木の高さを測る方法を説明しています。正方形の鼻紙を対角線に折り、斜辺に沿って見上げて、木の先端が見えるように移動します。その位置から木までの距離を測ると７間ありました。半間の高さから測っているので木の高さは７間半になります。(画像２参照)

画像１の木の右下の部分を拡大した画像が画像３です。何をしているのかと思いますが、木の高さを測っていることを説明しています。「これは、そまなどはかくのごとく、うちまたより木のすえを見申候て、さて、それより木の本まで打ちて、長さをいう也」とあり、杣人(木こり)が木を登らずに木の高さを測る方法の説明です。腰のところで上半身を直角に曲げて、地面すれすれに股の内側から木の先端を覗くようにします(目と股の内側の角度が地面に対して45度になるようにし、これで直角二等辺三角形ができます)。先端が見える位置まで同じ姿勢で移動します。木からこの位置までの長さが木の高さになります。

▲画像３『新編塵劫記　３巻』(京都大学附属図書館所蔵)部分

関孝和

関孝和は、出生年が不明で、没年は宝永５年(1708)です。延宝２年(1674)に『発微算法』を著し、その中で独自の記号法(傍書法)を用いて方程式を筆算で解けるようにしました。和算が高等数学として発展するための基礎を作りました。

『塵劫記』では円周率を３.16として、桶の体積などを計算させています。これは実用性を重んじたためです。関は、円周率を小数点以下10桁まで正確に計算しました。関の弟子の建部賢弘は、円周率を別の方法で小数点以下41桁まで算出しました。余談ですが、ホワイトデーは、「円周率の日」でもあります。

算額

算額は数学の問題が書かれた絵馬で、数学の問題が解けたことを神仏に感謝し、ますます勉学に励むことを祈願して奉納されたといわれています。美しい図形を扱った問題が多く、ほとんどが彩色されています。算額を奉納する風習は、江戸時代から明治時代まで続き、現存する算額は約1000件(江戸時代のものは約400件)といわれています。

遊歴算家

江戸時代には、寺子屋以外にも数学を教える専門の数学塾があり、農村部にもありました。その背景には、全国を旅して歩き、行く先々で数学を教える遊歴算家がいました。この遊歴算家が数学の普及に大きく貢献しました。有名な遊歴算家に山口和がいます。神田の長谷川数学道場で学び、指導者になりました。各地の人に算術を教えようと思い、文化14年(1817)から12年間で６回も、北は青森から南は長崎までの長旅に出ました。行く先々で「江戸から算術の大先生が来た」と歓待され、次の場所になかなか行くことができなかったそうです。千葉胤秀も遊歴算家の一人で、全国に3000人もの弟子がいました。千葉が文政13年(1830)に著わした『算法新書』は、自学自習できる優れた教科書として大ベストセラーになりました。

▲日本橋の福徳神社に奉納された算額

参考資料：『夢中になる！江戸の数学』桜井進　集英社文庫、国立国会図書館の電子展示会「江戸の数学」

【取材】文・写真：広報部会・前田太門

新年にあたり

江戸東京博物館　館長　**藤森照信**

両国駅を降り、国技館の横を進むと、まずバスの駐車場が見えてくる。その時、居並ぶバスの窓を見て、どこから来たかを確かめるのが楽しみだったが、この２年間、入場制限によりバスが来なくなった。しかしさいわい、制限が解かれ、楽しみが復活し、いつものようであることの幸せをかみしめている。コロナ禍の行先は予断を許さないが、早く日常が戻ることを願ってやまない。

コロナ禍の前と後では何がどう変わるのか、いろんな説があるが、歴史の教えにしたがえば、“時代の変化のスピードが上がる”ことはまちがいないであろう。わが館も歴史の教えに敏感でありたいと、４月から始まる建物の改修工事とそれにともなう休館を前に思っている。

新年のごあいさつ

江戸東京博物館友の会　会長　**待場　浩**

友の会の皆さま、新しい年を迎えられお慶び申し上げます。昨年はコロナ禍の中、会報『えど友』が年間を通して発行できたこと、セミナー・古文書講座・見学会も計画の約半分は無事に開催できたことは、会員の皆さまからのご支援、ご協力のたまものと感謝申し上げます。

本年は友の会の活動ベースとなる博物館が休館、友の会も休会となりますが、休会明けの再開を円滑に行うため、また９月に行った会員アンケート調査結果も踏まえ、休会中も可能な範囲で催事を行い、会員同士の絆が保たれるよう取り組んでまいる所存です。そして休館明け時には、改修なった江戸博でより一層館と友の会の良い関係が築かれ、活発な活動が行われることを切に願っています。

◆長期休館まであと３カ月！　休館対応プロジェクトからのお知らせです

休館対応プロジェクトチームは、「博物館長期休館中の友の会」について検討をしています。最終的な方針は、令和４年３月の臨時総会で発表しますが、ここでは途中経過をお伝えします。今回は、「アンケートから三つの数字」「休館中のサークル活動について」「休館中の催事に参加する方法」の３点をご紹介します。

1．アンケートから三つの数字

●９月に実施したアンケートは、会員の44%に当たる504名の方から回答をいただきました。(調査結果のまとめは、「総会案内」の送付の際、同封する予定です)

・**お伝えしたい数字その１**：全体の65.3%が「休館中もできる限り活動を続けてほしい」と答えています。

・**お伝えしたい数字その２**：休館中も活動を続けてほしいとされた催事は、全体で「セミナーが64.7%(81.8%)」「見学会が47.4%(79.3%)」「古文書講座が44.2%(83.8%)」となっています。(　)内はその催事に日頃参加している人が「続けてほしい」と答えた割合。

・**お伝えしたい数字その３**：メールやホームページ閲覧ができる機器を持っていないという人は、18.1%。逆に言えば約８割の人が何らかの機器(パソコン、スマホなど)を所有しているということになります。

2．休館中のサークル活動についてサークル世話人に聞きました(最終決定ではありません)

・**落語と講談を楽しむ会**＝ひらい圓蔵亭でのＤＶＤ落語鑑賞会、外部寄席鑑賞会、史跡散策会を予定

・**藩史研究会**＝定例会を年６回に半減し、見学会なども含めて年に10回程度の活動を予定

・**「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会**＝「古文書を読む会」に名称を変更し安南漂流記などを読む

・**『江戸名所図会』輪読会**＝休会に入るまでには、皆で話し合って決めたい

・**日本の大道芸伝承会**＝コロナ下でも活動してきた。休会中も活動を続ける

・**江戸を語る会**＝12月の例会で会員の意見を聞く。できれば活動を続けたい

・**太田道灌ゆかりの地を訪ねる会**＝難しい事情もあるので、休会中を含めて検討中

3．休館中の催事に参加する方法

●休館中に開催を予定している催事は、先にお知らせしていますようにセミナー、古文書講座、見学会の三つです。休館中は事務局がなくなり、会報『えど友』も休刊になるために、今までのような催事案内や申込受付ができません。休館中の催事のご案内と参加の申し込みは、原則ネット経由の催事案内サイトとＥメールで行うことになります。

●現在メールアドレスを登録し、催事案内の閲覧も申込もネットでされている方は、休館中もそのままで変更はありません。休館中も催事への参加を希望され、メールアドレスをお持ちで未登録の方は、事務局不在の中での運営の効率化のため、是非ともメールアドレスの登録をお願いします。

●ネットが利用できない場合は、葉書に「郵送での催事案内送付と申込受付を希望」と書いて事務局宛にお送りください。郵送対応ということで登録され、休館中は催事案内を郵送し、申込も葉書で受け付けます。但し催事案内印刷や郵送に費用がかかるため、登録費2,000円をご負担願います。登録の締め切りは1月31日です。

●参加方法登録の他に、全会員を対象に「催事サポートボランティア」の登録受付も行います。参加方法登録、催事サポートボランティア登録の詳細については、**『えど友』124号に同封したお知らせチラシ**をご覧ください。

えど友 会小路
会員交流欄

えど友 サークルだより

◆落語と講談を楽しむ会

10月19日(火)月番田中文彬さん秘蔵の映像で、古今亭志ん生の「風呂敷」、春風亭柳昇の「与太郎戦記」、三代目三遊亭金馬の「藪入り」などを鑑賞。参加者17人。

11月16日(火)月番は中村文男さん。亀戸梅屋敷寄席にて円楽一門の落語会で5席の落語を鑑賞。真打3人の演目は、三遊亭好之助の「一両三方損」、三遊亭楽京の「長短」、三遊亭神楽(らく)の「抜け雀」であった。参加者13人。

◆藩史研究会

10月8日(金)辻井清吾さんの発表。三田藩(摂津国・兵庫県三田市)は、山崎氏、有馬氏、松平氏(能美)の統治を経て、寛永10年(1633)、九鬼久隆が3.6万石で入封した。九鬼家はその後、13代隆義まで続いた。参加者11人。

10月22日(金)國定美津子さん担当の見学・学習会。牛久藩(常陸国・茨城県牛久市)は慶長6年(1601)、山口重政が牛久に領地をたまわり牛久藩1万石が成立。廃藩置県まで12代続いた。見学会は牛久城跡、牛久陣屋跡、神社仏閣など、牛久沼付近も見学した。参加者7人。

11月12日(金)谷川よしひろさんの発表。広島藩(安芸国・広島県)は関ケ原合戦後、福島正則が入封、藩政を確立。再検地で49.8万石に。咎にて元和5年(1619)信濃国高井野藩に転封、蟄居。後、同年紀州藩より浅野長晟が入封、以後、浅野家が幕末まで治政。参加者12人。

◆「米屋田中家明治日記」を読む古文書の会

10月、11月休会。

◆『江戸名所図会』輪読会

10月21日(木)担当は高野祐子さん。該当の4寺は江戸時代の墨引き内で現在の江東区白河、深川にある。法苑山浄心寺は4代家綱の乳母三沢局(法名浄心院殿妙秀日求大姉)の帰依を受け、建立された。道本山霊巌寺の開山は霊巌雄誉上人。上人が隅田川河口を埋め立てて霊巌島を築いた当時の草創(寛永元年、1624)。松平定信(白河藩主)の墓所がある。当知山本誓寺は英勝院(家康の側室、水戸頼房の養母)の帰依深く、本堂、山門などを建立。一蝶寺(蒼龍山宜雲寺)は英一蝶が住み、襖や板戸にことごとく絵を描いたことにより一蝶寺と通称される。参加者22人。

11月18日(木)担当は西村由香さん。江東区深川付近。日照山法禅寺と天王山霊雲院は移転している。龍徳山雲光院は開基が徳川家康の側室阿茶局。阿茶局の法号がそのまま寺の名称になっている。五本松は明治の末に枯死したが、昭和63年(1988)に現在の地に復活した。芭蕉庵の旧址は大正6年(1917)津波襲来の後、芭蕉愛好の石造りの蛙が発見され、それをここに祀り芭蕉稲荷とした。芭蕉記念館、芭蕉庵史跡展望庭園など、芭蕉ゆかりの施設が周辺にある。神明宮はその名前が深川の地名の由来となったこの地の開拓者、深川八郎右衛門が伊勢神宮の分霊を勧請して邸内に祀ったのが始まり。慶長年間(1596-1615)の創建で深川と共に発展し、現在は深川総鎮守神明宮となっている。参加者22人。

◆日本の大道芸伝承会

10月13日(水)発声練習の後、玉すだれやがまの油売りを練習。参加者3人。

11月10日(水)令和4年2月11日(金)に開催される烏山区民センター主催「新年子どもまつり」に出演することになり、定番の玉すだれに加え、物産飴売りや、かりんと売りなど江戸の物売りを稽古。参加者3人。

◆江戸を語る会

10月、11月休会。

◆太田道灌ゆかりの地を訪ねる会

10月休会。

11月25日(木)面影橋の「山吹の里碑」、新宿住友ビルの「黒猫玉ちゃんの像」を見てから江戸博企画展で道灌関係の展示を中心に見学。参加者23人。

●各サークルとも引き続きメンバーを募集しております。参加希望の方は、はがきに①サークル名②会員番号(必須)③氏名を記入の上、友の会事務局へお申し込みください。

館蔵古文書翻刻だより

◆B班　米屋田中家文書

『御下向御用留　拾一』

この帖には、和宮降嫁の随行者のうち東西本願寺へ宿泊した地下人の賄のために、派遣した要員の役割別(飯焚・煮方・焼方・洗方・酒方など)人数、身分に応じ提供した食事の献立・食数、役所への提出文書などが綴ってある。その中に米屋久右衛門(当主)が請負に際し、保証として沽券状を差出す文書がある。「依之身元為証拠、私所持川瀬石町(現日本橋二丁目)地面弐ケ所沽券状差上置候間、万ケ一御用向御差支ニも相成候ハヽ右地所可奉上納候」(原文のまま)とあり、請負とはいえリスクを負っていたことが分かる。

また話は少し古くなるが、2021年3月放送のNHK「歴史探偵」で、三河吉田藩の大名行列を裏から支える三河屋久右衛門が登場するが、実は米屋は吉田藩の殿様から屋号を貰っていたので、ここでは三河屋を名乗ったということだ。

友の会めも(開催日と人数)

令和3年10月～11月

◆役員会10月12日(火)14人。11月9日(火)13人。◆事業部会10月5日(火)18人。11月2日(火)18人。◆広報部会10月19日(火)8人。11月16日(火)10人。◆総務部会10月26日(火)11人。11月23日(火)7人。◆古文書講座 入門編：10月6日(水)午前60人。午後55人。11月10日(水)午前56人。午後59人。初級編：10月20日(水)午前58人。午後49人。11月17日(水)午前67人。午後45人。中級編：10月16日(土)午前28人。午後29人。11月20日(土)午前26人。午後24人。◆館蔵古文書翻刻プロジェクト10月から江戸博が使えるようになった。10月14日(木)A班学習室2人。在宅作業でメール連絡1人。10月28日(木)学習室5人。B班10月在宅作業でメール連絡6人。A班11月4日(木)学習室5人。11月11日(木)学習室4人。B班11月在宅作業でメール連絡6人。

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和３年９月 26 日）

定番・江戸城周辺探訪
ーその５（外濠）ー

雨が落ちて来そうな曇り空の下、東京メトロ赤坂見附駅出口付近の交番前に集合した一行は７、８人のグループに分かれて出発しました。外堀通りに沿って周辺の遺構を訪ねながら内幸町まで歩きました。

外濠と外堀通り

外堀通りの向かい側の坂上が、大山道から江戸城への玄関口赤坂見附でした。寛永13年(1636)に外敵の侵入を防ぐ目的で築造された赤坂御門を挟んで、紀伊徳川家と松江藩の屋敷がありました。明治維新後にはそれぞれ北白川宮邸と閑院宮邸に替わり、現在は東京赤坂ガーデンテラス紀尾井町、衆・参議院議長公邸と東急プラザ赤坂になっています。

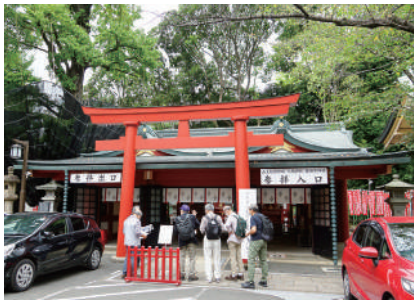
赤坂から虎ノ門にかけての台地では外濠築造に、新宿区の鮫が橋から清水谷、赤坂へと続く谷の湧水を集めた川が利用されました。明治以降、埋め立てられて濠の面影は全くありませんが、外堀通りの道筋は外濠の形をほぼとどめています。

▲ 山王日枝神社　西参道

赤坂の名所今昔

外堀通りからビルの谷間を右折すると、人足交代の「人継ぎ」が地名の由来という一ツ木通りです。左に折れると右側に、太田道灌の開基という平河山浄土寺があります。すぐ近くには、赤坂の新名所、赤坂サカスがあります。広島藩松平安芸守中屋敷でしたが、昭和11年(1936)の２・26事件でその名を残す近衛歩兵第三連隊の宿舎があった場所でもあります。ローマ字で書くとAKASAKASAKASで右から読むと「坂・坂・坂」になるという面白い話を聞きました。赤坂は本当に坂の多い街です。

再び外堀通りへ出ると、三角形の破風が特徴的な鳥居が見えます。長いエスカレーターを上ると山王日枝神社です。明暦の大火(明暦３年・1657)で麹町にあった社殿を焼失したため、万治２年(1659)、溜池を見下ろすこの地に再建されました。祭礼の山車は城内に練り入れることが許され、将軍が上覧したことから、「天下祭」と呼ばれました。日枝神社裏手にある山王稲荷神社は日枝神社



▲山王稲荷神社

が麹町から移転してくる以前からこの地にあって、昭和20年(1945)５月の空襲でも焼失を免れたため江戸時代の苔むした屋根を見ることができました。

溜池と坂道

日枝神社の急な男坂の階段を下りて、首相官邸を左に見ながら外堀通りに戻り、溜池の説明を聞きました。外濠築造より前に谷を流れる川をせき止めて造られた溜池でした。溜池は上水源でしたが、南側の土手には桐が植えられ、広重が『名所江戸百景』に描くほど風光明媚な江戸の名所になりました。

六本木通りから、榎坂の緑豊かな遊歩道を進むと、右側は米国大使館です。坂道が折り重なった坂の頂上で、「忠臣蔵・南部坂雪の別れ」の話を聞いてから特許庁方面への坂道を下りました。坂下の交差点辺りには当時堰があり、この堰から流れ落ちる水音がドンドンと聞こえたので「赤坂のドンドン」と呼ばれました。広重が、これを「虎の門外あふひ坂」(名所江戸百景)に描いていますが、葵坂は明治初期の溜池埋め立てで削られ、残っていません。

▲金刀比羅宮

外濠石垣の遺構

ビルの谷間を抜け、讃岐丸亀藩の邸内社だった金刀比羅宮(金毘羅大権現)を訪れました。江戸庶民に開放され、御利益がありそうな㊀の神紋で人気となりましたが、明治維新の神仏分離令後、明治22年(1889)に金刀比羅宮と改称し現在に至っています。青龍・白虎・朱雀・玄武の四神が取り付けられた鳥居が見事です。

虎ノ門から日比谷にかけて、外濠の石垣遺構がいくつか見られます。文部科学省構内には平成16年に発掘された石垣の展示があり、水面の位置や水面下の状態などが分かりやすく解説されていて、石垣を担当した藩の刻印も確認できました。

町名「虎ノ門」の由来、「虎之御門」は、江戸城南西白虎の方角に築かれた見附門で、桜田門から東海道へ通じていました。慶長11年(1606)、肥前佐賀藩により築かれましたが、明和９年(1772)の大火で焼失、すぐに復元されましたが明治維新で取り壊されました。

虎ノ門交差点から内幸町まで、外堀通りより内側の外濠跡に沿って、残された石垣に注目しつつ歩きました。都営三田線内幸町駅付近で、鹿鳴館、日比谷公園やこの付近の歴史を聞いて解散となりました。

参加者70人。

【取材】文：広報部会・大橋弘依
写真：同・秋元康良

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

第208回　江戸東京博物館友の会セミナー（令和3年10月24日）

長谷川雪旦
～江戸の街の一級資料『江戸名所図会』を描いた絵師～

講師　海老塚耕一さん（多摩美術大学教授）

はじめに

図書館にこもるのが好きな学生でした。同時に、好きな研究をするため特定の師につかず、独学で勉強しました。そんなある日、図書館で誰も触ったことがないであろう、真新しい本が眼に止まりました。それが『江戸名所図会』でした。頁を開いてみると、たちまちとりこになってしまいました。

日本の絵画視点と欧米の絵画視点

元々日本の俯瞰図に興味を持っていました。中でも初期風俗画、狩野永徳の「上杉本　洛中洛外図屏風」は見れば見るほど面白く思っていました。青春期に欧州を放浪した際、ヨーロッパの絵画はフィレンツェのルネサンスから始まり、当たり前に一点透視図法で描かれているわけです。固定された一つの眼差しで世界を決めてしまう視点です。そんな視点は全体主義の象徴のようにも思え、とてつもなく恐怖を覚えました。対して日本の俯瞰図は、遠近大小に関わらず、自在に移動し、すぐ近くで見ているように描かれています。小さな人物や事物も遠くからではなく、すぐそばで見ながら縮小されているだけです。これは長谷川雪旦にも、共通する描き方だと思いました。

西洋美術についての碩学、高階秀爾も『日本美術を見る眼』で、次のように述べています。「西欧的な空間構成を画面に実現するためには、画面のあらゆる部分が一つの視点から眺められなければならない。ところが、洛中洛外図のような細部描写を寄せ集めたような画面では、一定不変の視点というのは存在しない。(中略)町中を自在に動き回って、その場で目にしたものを、着物の柄まではっきり見えるほどの至近距離から描いているのである。あるいは、一つ一つの場面を細かく見るために、自由に京都の町を動き回っていると言ってもよいだろう」

洛中洛外図屏風の見方

洛中洛外図は人気も高く様々な論争もありましたが、上杉本の研究ばかりでした。その見方が変わったのは、歴博甲本が狩野元信(永徳の祖父)の作品と確定されたからです。それまでは上杉本に至るまでの未熟な作品と見なされていました。歴博甲本が確定することによって、はじめて洛中洛外図の研究が見直されるようになりました。

洛中洛外図は、右隻左隻と並べて鑑賞するものではなく、向かい合わせに立て、その真ん中に立って鑑賞するものでした。右隻は東側へ左隻は西側へと向かい合わせに立て、鑑賞者は同時に両方を見るのです。そうすると現実の景色と重なります。いかにも人間の知恵というか、遊び心が見え面白いと思います。

『江戸名所図会』の視点、日本人の見方

長谷川雪旦は雪舟の画風を好み、長谷川等伯への思いもあり長谷川雪旦と名のりました。安永9年(1780)秋里籬島(りとう)による『都名所図会』が刊行されると、江戸でもこれに匹敵するようなものを出版したいと考えたのが、神田雉子(現司)町名主(ちょうなぬし)齋藤幸雄です。本文を自ら書き、挿絵を北尾重政に描かせる予定で、寛政10年(1798)に出版許可を取りましたが、翌年に病死、婿養子の幸孝へ引き継がれました。幸孝は、重政の挿絵が全く進んでいないことを知るや長谷川雪旦に変更し、『江戸名所図会』の企画作業が始まりました。

文化15年(1818)、幸孝も逝去すると孫の幸成(月岑)に引き継がれました。親子三代40年かかって、天保5年(1834)に第1～3巻(10冊)が、同7年に第4～7巻(10冊)が刊行されました。名所や景勝地ばかりではなく、寺社仏閣、生活風俗などに至るまで、650枚にもおよぶ緻密でリアルな挿絵を入れ、江戸の地誌の集大成として、類のないものとなりました。

『江戸名所図会』の主張

将軍の膝元でありながら町人の町として栄えた江戸の町そのものを表したかったと思います。江戸の繁栄をどのように表現しようとしたのか。最初に武蔵国の始まりとして、日本武尊を描いています。続いて東南から江戸湾に上る朝日を描いています。

将軍に新年の挨拶をするため、江戸城へ向かう諸大名の姿を描いたのが「諸侯登城図」です。当時の諸大名はそれぞれ領国を背負っていましたので、正月の門松は特に工夫を凝らしていました。佐賀藩の「鼓の胴」は『名所江戸百景』にも描かれるほど著名でした。秋田藩では門松ではなく足軽を交代で立たせていました。これも「佐竹の人飾り」として知られていました。ほかにも松浦(まつら)藩の「椎の木松浦」、綾部藩の「九鬼の札」など多彩でした。それらを見物しながら回るのが江戸っ子の楽しみでした。諸侯登城図は武家を描いた唯一の図ですが、そんな庶民の眼差しで描かれたものです。八つ見橋(一石橋)は、江戸の橋を自分の立っている橋も含めて八つの橋をすべて見渡せる橋として知られていました。日本橋については、別図にありますが、京橋と共に擬宝珠がついているのが、日本橋近辺に住んでいる江戸っ子の自慢でした。

『江戸名所図会』は江戸の暮らしの百科事典です。刊行の目的は、将軍のいる町に住む江戸っ子のプライドを持ちつつ、そこに暮らす庶民の視点を描きたかったのだろうと思います。　　参加者140人。

【取材】文：広報部会・光田憲雄
写真：同・前田太門

第209回 江戸東京博物館友の会セミナー（令和3年11月3日）

『名所江戸百景』考 ―百万都市に向けた眼差し―

講師　大久保純一さん（国立歴史民俗博物館副館長）

美術史の中で特に浮世絵を中心に『名所江戸百景』をどう考えているか、大きな目線で話をさせていただきます。

概要と制作プラン

幕末期には、100枚前後の揃物（シリーズ）の浮世絵を数年かけて出版するものが多くありました。『名所江戸百景』は、広重の最晩年の安政3～5年（1856～58）にかけて出版されましたが、出版の途中で亡くなったので完成したものかどうかは分かりません。少なくとも100図以上を出版しました。版元は魚屋栄吉で、かつては魚屋を「うおや」と読ませていましたが、国立歴史民俗博物館の所蔵に「肴屋栄吉」と書かれている史料があるので、「さかなや」と読むのが適切です。55枚が画帖化された広重の『東海道五拾三次』など、江戸末期の大規模揃物の流れを引き継いでいます。『藤岡屋日記』に「高級な摺りで一般のものの5、6倍の高値の錦絵揃物が飛ぶように売れている」という主旨の記述がありますが、『名所江戸百景』にもそうした極上摺りのセットが見られます。

『東海道五拾三次』は横長の図ですが、『六十余州名所図会』では縦長の図になっています。風景画は横長画面の方が描きやすいのですが、揃物を本のように装丁すると縦長の方が扱いやすくなります。『六十余州名所図会』を描き終わった直後から『名所江戸百景』を描き始めています。

『名所江戸百景』は、目録を含めて120枚、その内「赤坂桐畑雨中夕けい」は二代広重の作なので、119枚になります。目録は、広重が亡くなった後に、梅素亭玄魚が描いています。目録には、春42図、夏30図、秋26図、冬20図ですが、明らかに季節を間違えているものがあります。春の部にある「目黒元不二」は紅葉した木が描かれていて桜の木ではありません。広重は、紅葉は朱色、桜はピンクで描いています。当初から季節分類を企図したか疑問に思われます。

構図の特徴・先行図様の関係

『名所江戸百景』は、当初、『江戸名所図会』を模倣して俯瞰的構図で描いています。その例を「千束の池袈裟懸松」に見ることができます。『江戸名所図会』の挿絵「千束池 袈裟掛松」と比較すると松の枝ぶりまでも同じです。縦長の画面で絵を描くと空の部分が多くなるので、それを解消するため、俯瞰的な構図を用いたと思われます。

安政3年の終わりごろから、絵の描き方が変わり低い視点から描いています。ゴッホが模写したことでも有名な「亀戸梅屋舗」は、水平からの視点で梅の木をクローズアップして描いています。人気の高い作品には低い視点・水平から見て、手前を大きく描く近像型構図の作品が多くあります。先行例に、18世紀後半に洋画の手法を採り入れた秋田蘭画があります。秋田蘭画は後代の浮世絵などにも大きな影響を与えました。代表的な作品である、秋田藩主佐竹曙山筆の「松に唐鳥図」を見ると、縦に長い掛け軸に合わせて松の幹を前面に大きく描いた風景画になっています。とてもインパクトのある構図で見応えがあります。広重は、この近像型構図を『名所江戸百景』より前に描いた『六十余州名所図会』でもすでに一部採用していました。近像型構図は、めりはりの効いた構図であるだけでなく、鑑賞者と視点を共有する心理的効果があります。一方でデメリットとして、名所絵としての説明性が薄れてしまいます。

広重は、他にも葛飾北斎の絵本『富嶽百景』を参考にしていました。「市中繁栄七夕祭」も『富嶽百景』の「七夕の不二」を参考にしています。両者の構図上の相違は、北斎の構図は近景と遠景で構成されていますが、広重は空間を近・中・遠と連続性をもたせて描いている点にあります。

主題上の新傾向

『名所江戸百景』には、定番の名所である目黒不動、洲崎海岸（深川）、三囲稲荷などがありません。江戸土産の名所絵揃物としては不可解です。一方、江戸の伝統的行事の愛宕神社の強飯式、山王祭、住吉明神祭礼など、江戸の町の歴史・伝説を示唆する図が散見されます。名所絵は、地方から江戸に来た人々が地元に帰るときの格好の土産です。江戸博の常設展示室にある絵草紙屋は、芝神明前の和泉屋の店先を再現しています。芝神明前には絵草紙屋がたくさんありました。この周辺には武家屋敷が多くあり、地方から来ていた武士が地元に帰るときに買っていました。『名所江戸百景』は画帖だと、とても高価なものになるので、土産には不向きです。土産というよりも、江戸の富裕層が購入することを想定していたのかもしれません。

レポーターからひとこと

『名所江戸百景』には斬新な構図の絵があり、好きな作品です。講演を聞いて、作品に対する認識が深まりました。摺りによって、高価なものがあることに驚きました。

参加者154人。

【記録】文・写真：広報部会・前田太門

江戸東京博物館友の会　見学会　（令和３年 10 月 31 日）

再訪　広重『名所江戸百景』周辺探訪
ーその２（本所深川・大川端周辺）ー

再訪名所江戸百景の２回目は両国から深川方面を歩きます。ＪＲ両国駅西口に集合後、あいにく降り始めた雨の中を出発しました。

回向院から両国橋へ

まず訪れた回向院は明暦の大火の犠牲者を供養するために創建された寺で、江戸中期からは全国の有名寺社の出開帳寺院となって賑わいました。また、江戸後期には勧進相撲の定場所と定められて大勢の観客を集め、明治42年(1909)には初の相撲常設館として旧両国国技館が建てられました。境内には山東京伝・竹本義太夫・鼠小僧次郎吉などの墓があります。また、隣接する両国シティコアには土俵をイメージした金属製の輪が埋め込まれています。「両ごく回向院元柳橋」絵には回向院相撲の太鼓櫓と対岸の元柳橋・薬研堀が描かれています。

回向院を出て左手に進むと両国橋です。江戸時代にはやや下流に架かっていて、回向院正門(現存せず)に向かっていました。「浅草川大川端宮戸川」絵は橋の下から上流を描いていて、大山詣り講団の船が絵の中心です。橋の近くには大山詣りの水垢離をした「石尊垢離場」があり、現在は駐車場の脇に説明板が立っています。

江島杉山神社から新大橋へ

竪川の一之橋を渡るとすぐ江島杉山神社があります。徳川綱吉から土地を与えられた杉山和一総検校が江の島弁天から屋敷内に勧請した弁財天社で、境内には江の島弁天岩窟を模した洞穴が残されています。また、

▲新大橋

付近の隅田川岸には幕府の「御船蔵」があり、軍船安宅丸（あたけまる）が係留されていましたが、天和２年(1682)に廃船と

▲「深川萬年橋」絵

なり「御船塚」が築かれました。塚は現存しませんが、「安宅丸由来碑」が立てられています。

新大橋通りに出ると、右手が新大橋です。橋を渡り隅田川テラスに下りて下流へ向かいます。天気が良ければ散歩したい場所です。150ｍほど歩いた芭蕉記念館の見える辺りに、当時の新大橋が架かっていました。有名な「大はしあたけの夕立」絵は新大橋越しに上流の御船蔵辺りを描いたもので、あたけ(安宅)は安宅丸に由来する地名です。

萬年橋から芭蕉庵辺りへ

さらに進んで清洲橋を逆に渡っていくと、小名木川に架かる萬年橋があります。当時の橋は現在よりやや下流にあり、「深川萬年橋」絵は手桶に吊された亀越しに隅田川を眺めるユニークな構図になっています。橋を渡ってすぐ左に入ると、芭蕉稲荷神社があります。この地にあった深川芭蕉庵の近くから芭蕉愛好といわれる石造りの蛙が発見され、大正６年(1917)に祀られました。石蛙の現物は芭蕉記念館に展示されています。

さらに進んで堤防手前の階段を上ると、芭蕉庵史跡展望庭園があります。ここからの隅田川の眺めは素晴らしく、かつては隅田川と箱崎川の分岐点辺りに中州がありました。「みつまたわかれの淵」絵には荷船が行きかう日常風景が描かれていますが、18世紀後半の田沼時代や明治時代には埋め立てられて歓楽地となったこともありました。

安宅丸稲荷神社から清澄庭園へ

新大橋通りの方へ戻り、幕府の備蓄米藏である「お籾藏」跡を通っていくと、安宅丸の守護神(船霊)を祀った安宅丸稲荷神社があります。個人のお宅の庭にあるため普段はシャッターが閉まっているのですが、今回は特別に開けていただいて参拝することができました。この東側には小名木川と竪川を結ぶ「六間堀」があり、

▲安宅丸稲荷神社

付近の八名川公園内に説明板が立てられています。さらに東に向かうと清澄通りの手前に深川神明宮があります。深川の地を開拓した深川八郎右衛門が、伊勢神宮の分霊を祀ったのが始まりです。

清澄通りを南へ進んで、小名木川を再び渡っていくと清澄庭園があります。かつては下総関宿藩主、久世大和守の下屋敷で、明治になると岩崎弥太郎が買い取って「深川親睦園」とした庭園です。庭園前で解散となりましたが、さすがにこの雨では庭園に入る方もいないようでした。

参加者100人。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

（えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています）

特別展「縄文 2021 ―東京に生きた縄文人―」観覧記

縄文展は数多く行われていますが、本展は東京の縄文人の暮らしに焦点を合わせたユニークなもので、取り上げられるのはすべて東京の遺跡です。プロローグでは「多摩ニュータウンのビーナス」と称される土偶に出迎えられた後、最新の縄文時代像と自然環境のパネルにより、全体像をつかむことができます。

第1章　東京の縄文遺跡発掘史

まず東京の遺跡分布図を見て、いかに縄文遺跡が多いかに驚かされます。特に貝塚は、縄文海進時の海岸線に沿っているのがよく分かります。最も有名なのが大森貝塚で、発見者E.S.モースの業績パネルと共に、土器・貝などの出土品が並んでいます。続いて、島嶼（とうしょ）の遺跡（パネル展示）、沿岸部の貝塚、台地の遺跡、山地の遺跡という区分で、代表的な遺跡の出土品が展示されています。

第2章　縄文時代の東京を考える

ここでは集落・葬墓制・道具という視点から、東京の縄文人の特性を考察しています。土器では、草創期（試行錯誤の時代）、早期～前期（安定化への時代）、中期（過度な装飾と大型化の時代）、後期（多様化と機能美の時代）という時系列の展示となっており、時期ごとの特徴がよく分かります。この他、石器（狩猟具・加工具）、骨角器（漁具）、木工・漆工、ヒスイ・コハク（装飾品）などの多彩な出土品によって、当時の生活がうかがえます。

▲環状集落再現模型

第3章　縄文人の暮らし

前章までのガラスケースが並ぶ展示から一転して、大空間が広がっています。「海岸部の暮らし」では、まず2艘（そう）の丸木舟が置かれ、浜辺がイメージされます。展示品の大部分は北区西ヶ原貝塚の出土品で、土器や石器によって貝塚の暮らしが実感できます。「丘陵部の暮らし」では、中央に置かれた「環状集落再現模型」が目を引きます。墓地を中心として竪穴式住居が並び、周囲の森や川も作り込まれ、さらに人形が配されることによって、縄文人の暮らしが生き生きと再現されています。模型の周囲には一括廃棄遺物、生業の道具、まつりの道具、服飾、装身具などが展示されていて、さらに想像が広がります。最後には「東京の縄文土偶100」のコーナーがあり、様々な表現や顔の表情に思わず見入ってしまいます。

第4章　考古学の未来

パネル展示により、考古学を楽しむことや、市民・社会が幅広く活用できる資料を公開していくことが、考古学の未来であると示されています。

エピローグでは「埋蔵文化財の保護と活用」についての説明があります。こちらには期間限定で国宝の土偶「縄文のビーナス」と「仮面の女神」が展示されました。

全体を通じて、東京の縄文時代が具体的に分かる、親しみやすい展覧会でした。

【取材】文・写真：広報部会・菊池真一

江戸博クリップ

初めてのミュージアムトーク

事業企画課展示事業係　鈴木　彩加（すずき　あやか）

令和３年５月より展示事業係に配属になりました鈴木と申します。江戸東京博物館とはご縁があり学芸員実習、アルバイトとお世話になり、今年から職員として勤務しております。昨年まで学生であり、社会人１年目の未熟者ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

先日、私は人生初のミュージアムトークを担当しました。アルバイトの時から補助として参加しており、贅沢な経験ですが、学芸員さんによる解説を間近で聞かせていただいておりました。参加するたびに新しい知識が増え、自分もいつかこんな風に来てくれた方々に新しい情報を伝え、有意義な時間が提供できる学芸員になりたいと思いました。まさかその願いを叶えるチャンスがこんなに早く巡ってくるとは、全く想像していませんでした。

トーク当日は、予想より多くの方が参加してくださり、大盛況。基礎的な情報から興味をもってもらえそうな豆知識を織り交ぜて15分間、知識を総動員してトークしました。先述したような有意義な時間が提供できたかは分かりませんが、参加者様が「とても面白かったです」や「初めて知って興味を持ちました」とお声がけくださり、胸が熱くなりました。このご時世、来館者様と直接対面でお話できる機会はあまりありません。その中でミュージアムトークを通して直接感想をいただき、この仕事のやりがいを感じることができました。今回の経験を糧に、初心を忘れず精進して仕事に取り組んでまいります。

◆このコラムは江戸東京博物館のいろいろな職務の方々に執筆をお願いしています。

江戸

名所図会を歩く…58

[飛鳥山から瀧不動尊]

金剛寺　仁王像

前回の平塚神社の最寄り駅、JR上中里駅前で「飛鳥の小径」という、線路沿いに飛鳥山へ通ずる道があることを発見しました。番外ですが、この道を歩いて七社神社から西ヶ原一里塚に寄り道して、飛鳥山公園内に入ることにしました。

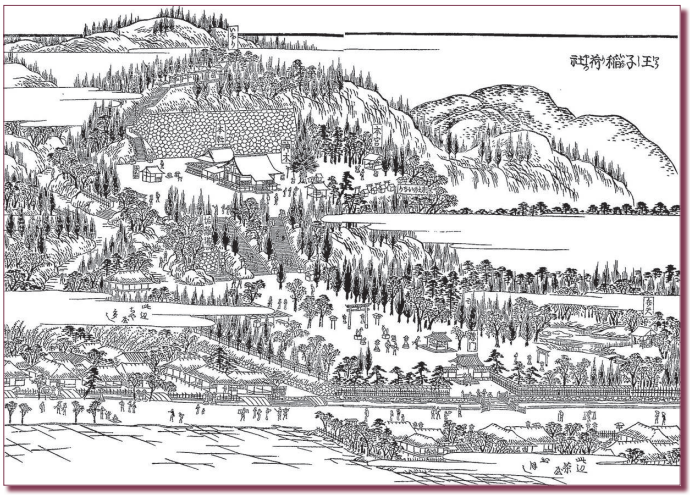
飛鳥山

飛鳥山は、元亨年間(1321-24)に豊島氏が紀州新宮の飛鳥明神の分霊を建てた山林で、それが山の名の由来となりました。８代将軍に就任した吉宗は、飛鳥山を江戸庶民の行楽の場とするべく、江戸城吹上で桜の苗木を育て、享保５年(1720)から飛鳥山に植えていきます。1000本以上の桜が見頃になってきた同18年には、水茶屋建設を許可して一般にも公開し、飛鳥山は江戸庶民の花見の名所となりました。同年閏11月には飛鳥山の由来や、吉宗が桜を植えてこの地を整備したことなどを書いた「飛鳥山碑」が建てられました。難解な石碑として有名なこの碑は飛鳥山のランドマークとなって、芝山に桜と石碑を描けば、誰もが飛鳥山と分かるほどでした。図会でも「飛鳥山全図其二」にしっかり描かれ、碑文の全文も記されています。

明治６年(1873)には太政官布達によって、上野・芝・浅草・深川とともに日本最初の公園に指定されました。渋沢栄一が本邸とした飛鳥山の南側一帯は、後、飛鳥山公園に編入され、跡地には旧渋沢庭園、北区飛鳥山博物館、紙の博物館、渋沢史料館など、渋沢の足跡をたどれる施設が多くあります。

王子権現社から王子稲荷社

飛鳥山から旧岩槻街道に下りて、音無橋を渡り、少し行くと北区役所の向かい側に大きな鳥居が見えてきます。王子権現社(現王子神社)です。王子神社の創建は定かではありませんが、元亨２年(1322)、領主豊島氏が石神井川沿いの高台に紀州熊野三社権現より王子大神をお迎えして、若一王子宮(にゃくいちおうじのみや)として祀られるようになったといわれます。神社下を流れる石神井川も紀州の地名を擬してこの付近では特に音無川と呼ばれるようになりました。社殿の右側、音無川左岸崖線の肩にイチョウの大木があります。寛永11年(1634)造営の社殿も含め、戦災で境内はすべて焼失しましたが、この大イチョウは唯一焼け残り、都の天然記念物となりました。境内左手にある関神社から右に出て権現坂を下り、王子稲荷社へ向かいます。



▲長谷川雪旦　王子稲荷社

平日の王子稲荷社(現王子稲荷神社)へは左脇の稲荷坂を上って境内へ入ります。社殿は寛永11年、王子神社とともに幕府の手で造営され、元禄16年(1703)の修理を経て、現在の社殿は文政５年(1822)建立によるものです。人々の厚い信仰を集め、大晦日の狐火伝承も加わって参詣人も多く、二月の初午には特に賑わいました。雪旦は「装束畠　衣裳榎」で、榎の下に集まるキツネたちを挿絵に描いています。

金輪寺から瀧不動尊

王子権現社と王子稲荷社の別当であった旧金輪寺は、神仏分離令により廃寺となりました。現金輪寺はもと禅夷山東光院金輪寺の塔頭の藤本坊が金輪寺の寺号を引き継ぎ、王子山金輪寺となったものです。王子稲荷を出てすぐ左にあります。ここから装束稲荷神社に寄って王子駅親水公園口に向かいます。

石神井川は昭和30年代以降、河川改修工事で流路が付け替えられ、この辺りは音無親水公園として昔の面影を残す遊歩道になっています。音無橋の下を通りしばらく行くと、自然と坂を登って川の音が聞こえてくる石神井川左岸の道となります。松橋を通り過ぎ、紅葉橋で対岸に渡ると、金剛寺があります。金剛寺の裏側の崖下には岩屋があって、弘法大師作と伝えられる弁財天像が祀られていました。戦前までは洞窟の中に祠がありましたが、戦後は石神井川の水位が増し、祠は外に安置されるようになりました。その後、護岸工事で洞窟もふさがれました。この辺りは音無もみじ緑地と呼ばれています。

金剛寺に戻ります。真言宗豊山派寺院の金剛寺は、文化(1804-18)のころから紅葉の名所となり、紅葉寺とも呼ばれます。山門を入ると、左右にはちょっとユーモラスな仁王さまが立っています。境内はそんなに広くはありませんが、木々の手入れもよく、紅葉の季節はさぞや見事であろうと思わせる気持ちの良い空間です。山門手前右側には、かなり判読が難しいですが、岩屋弁財天道標と正受院道標が立っています。

金剛寺からそのまま右岸を歩いて音無橋方面に戻ります。紅葉橋辺りは元の石神井川の流路がU字型になって残され、音無さくら緑地公園となっています。公園の中を通ってまた元の道を下り、右側に入って少し行くと瀧不動尊(正受院)です。この寺を開いたと伝えられている僧が、石神井川が洪水のときに川から不動明王の霊像をすくい上げ、修行している滝の傍らに安置したため、この滝は不動の滝と呼ばれるようになったといいます。この像は現在不動堂に安置されています。不動堂の左奥の竹やぶの中には不動の滝跡を示す石碑が、本堂に向かって左側手前には江戸時代後期の北地探検家近藤守重、通称重蔵の珍しい甲冑姿の石像がありました。

【取材】歩いた人(文・写真とも)：
広報部会・中村貞子

(えど友ホームページに地図と写真レポートが掲載されています)

催事案内

新型コロナウイルス感染防止にご協力を

コロナの収束まであと一歩。基本的な感染防止策を取って催事にご参加ください。

◆発熱、咳などの症状がある、または体調不良の際の参加は、ご遠慮ください。

◆来場時、参加時には、「検温、手指消毒、マスクの常時着用」を徹底してください。

◆要請に従って、催事参加者の氏名及び緊急連絡先を記載した名簿の作成・保存は引き続き行います。

事業部会長　川上由美子

古文書講座

◆１月から今年度最終の第３期を開講

休館前、館内で行われる最後の古文書講座となります。申込の受付は終了しています。日程は下記の通りです。

◆入門編　講師：田中潤さん(学習院大学非常勤講師)
- 開催日：１／12(水)、２／２(水)、３／２(水)

◆初級編　講師：安藤奈々さん(学習院大学大学院史学専攻)
- 開催日：１／19(水)、２／16(水)、３／16(水)

◆中級編　講師：吉成香澄さん(徳川林政史研究所非常勤研究員)
- 開催日：１／15(土)、２／19(土)、３／５(土)

- 時間：午前の講座は10時30分～12時30分
  午後の講座は14時～16時
- 会場：江戸博１階会議室(中級編２月19日のみ学習室)
- 定員：各講座 午前、午後とも　80人：会員のみ
- 参加費：全３回2,000円(初回一括払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

友の会セミナー

第 211 回「江戸時代人の動物観ー「不思議な存在」狸は化ける　狐はどうする?」

講師　石田　戢さん(動物観研究所所長)

◆明治の文明開化以後、社会は大きな変化を遂げたが、動物観についても同様のことが言える。江戸時代、動物は理論、学問の対象として考えられたことはほとんどなかったが、昔話の主人公となって道徳的素材として大いに用いられた。また、妖怪的であったり、憐みの対象であったり、動物食文化などで、現在とは様々な特徴的な違いがある。今回はその中から、狐と狸、昆虫、そして生類憐みの令を取り上げ、欧米や現在との比較を通じて、江戸時代の動物観の一端を考えてみる。

◆講師略歴：いしだ・おさむ
1946年東京生まれ。71年東京大学文学部卒、同年上野動物園勤務、井の頭自然文化園、葛西臨海水族園勤務などを経て多摩動物公園副園長、帝京科学大学教授、千葉市動物公園園長。退職後、動物観研究所所長。その間、ヒトと動物関係学会会長、ボルネオ保全トラストジャパン理事長など。

- 開催日時：１月21日(金)　14時～15時30分
- 申込締切：１月10日(月・祝)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】川上由美子(事業部会)

第 212 回「蔦屋重三郎～写楽・歌麿を生み出した名プロデューサー～」

講師　松山龍夫さん(『版画芸術』編集主幹)

◆浮世絵版画の役者絵で有名な写楽や美人画で知られる歌麿の名は、日本のみならず海外にも広く知れ渡っている。しかし、その背後に彼らを生み出したプロデューサーといえる蔦屋重三郎がいなければ、写楽も歌麿も存在しなかったとも言えるだろう。その理由を、「吉原と歌舞伎という二大悪所をめぐる江戸文化」と「浮世絵版画(錦絵)・細見・狂歌本などの出版物」の二つの面から、版元蔦屋と写楽・歌麿の関係性を探る。

◆講師略歴：まつやま・たつお
1952年名古屋市生まれ。京都大学文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。季刊『版画芸術』の編集長を30年以上務め、現代版画を中心に日本の版画について同誌で発信を続ける。著書に『版画、「あいだ」の美術』。

- 開催日時：１月29日(土)　14時～15時30分
- 申込締切：１月13日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】中村明義(事業部会)

第 213 回「徳川家康はなぜ三浦按針を外交顧問としたのか」

講師　鈴木かほるさん(歴史研究家)

◆通説では、三浦按針は英蘭貿易のために外交顧問として重用されたことになっているが、実はそうではない。それは旧教国スペインとの貿易のためである。浦賀湊にスペイン船招致を画策する家康が、なぜ、その敵国のプロテスタントの三浦按針を顧問としたのか。また、彼の来日から母国イギリスとの国交が樹立されるまでの13年間、彼は何をしていたか。浦賀貿易にどう関わり、どう家康と関わったか。禁教により平戸に移住するまでをお話しいただきます。

◆講師略歴：すずき・かほる
神奈川県在住。国学院大学文学部史学科卒。中世史専攻。三浦一族研究会特別研究員。元ＮＨＫ文化センター講師。現在、国史学会、鎌倉遺文研究会、日本海事史学会所属。ＮＨＫ・Ｅテレ、民間テレビなどに出演、講演など多数。著書は、『徳川家康のスペイン外交』、『相模三浦一族とその周辺史』、『史料が語る向井水軍とその周辺』などの他、論文多数。平成28年、瑞宝単光章叙勲。

- 開催日時：２月13日(日)　14時～15時30分
- 申込締切：１月27日(木)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】國定美津子(事業部会)

第214回「馬と往く街道と宿場」

講師　村井文彦さん(馬の博物館学芸員)

◆かつて、馬は人間の暮らしと深く関わっていました。その華々しい活躍の数々は史書や物語によって長く語り伝えられています。そして、あまり触れられることはありませんが、日々の地味な働きもまた伝えられています。初めて馬で旅に出た大国主命以来、都に上る農民、武蔵から筑紫に赴く防人、駅路を往来した駅馬等々、数多くの人馬の姿が六国史や万葉集に見られます。都と鄙を往復した平安朝の官人や彼らが見た情景、中世・近世の路を行く人馬もまた、史料からうかがい知ることができます。また、東海道・東山道などの主要な道路の他にも、例えば「塩の道」などと呼びならわされる、生活に欠かせない道が野を越え山を越えていました。これらの、長きにわたって途絶えることなく村や里や町を、従って人と人を結んだ旅路と、そこを行き来した人馬に私たちの祖先の足どりをふりかえって見てみましょう。

◆講師略歴：むらい・ふみひこ
1957年東京都新宿区生まれ。立教大学大学院修了。専攻は日本近世史(江戸近郊農村など)。馬の博物館・JRA競馬博物館で学芸員を務める。

- 開催日時：３月11日(金)　14時～15時30分
- 申込締切：２月28日(月)必着
- 会場：江戸東京博物館・１階大ホール
- 定員：200人　同伴者可(はがきに氏名・電話番号連記)
- 参加費：会員500円・同伴者600円(当日払い)

【企画担当責任者】阪上克弘(事業部会)

見学会

浮世絵と古地図で巡る江戸～傳通院とその周辺を巡る～

◆徳川家の女性たちが眠る別名「女寺」といわれる傳通院を中心にその周辺を巡ります。家康生母於大の方、孫の千姫、家康の側室、家光の正室孝子の方などの生き様に思いをはせます。また、傳通院にある清河八郎、佐藤春夫、柴田錬三郎などの墓所も巡ります。傳通院から、歌川広景の浮世絵「小石川にしとみ坂の図」、葛飾北斎冨嶽三十六景「礫川雪の旦」に描かれている「北の牛天神」を通り、解散場所の飯田橋駅までの約３時間のコースです。

- 開催日：３月20日(日)小雨決行、受付後順次出発
- 受付開始：12時15分　受付終了：12時45分(時間厳守)
- 集合場所：都営地下鉄三田線「春日」駅Ａ３地上出口
  南北線丸ノ内線「後楽園」駅　大江戸線「春日」駅地下連絡
- 申込締切：３月３日(木)必着
- 定員：80人　同伴者可(保険の都合上、申込はがきに氏名、住所、電話番号連記)
- 参加費：会員、同伴者とも500円(当日払い)

【企画担当責任者】中村明義・小西幸男(事業部会)

常設展見学会

◆江戸東京博物館は、４月から長期休館に入ります。日本橋を渡って行けば、いつもそこには楽しさと発見がある常設展ともしばらくの間お別れです。友の会では、常設展をもっと知り、よりお楽しみいただくために「常設展見学会」を企画しました。お誘い合わせの上、残り少ない常設展を十分にお楽しみください。いつもと少し雰囲気が違う室内を巡る見学会です。ご案内時間は、１時間半程度を予定しています。

※2カ月分のご案内となります。申込は各月ごとにお願いします。
※なお、新型コロナの感染状況によっては内容の変更や中止になる可能性があります。

- 開催日：２月20日(日)東京ゾーンのご案内となります
  ３月21日(月・祝)江戸ゾーンのご案内となります
- 受付開始：11時
- 集合場所：江戸東京博物館　正面玄関入口外(そと)、ポスト前
- 申込締切：２月開催分　　２月７日(月)必着
  ３月開催分　　３月７日(月)必着
- 定員：各回30人　同伴者可(はがきに、氏名、住所、電話番号を連記)
- 参加費：無料**(会員は会員証を忘れずに持参してください。同伴者は常設展観覧券を購入の上集合してください)**

【企画担当責任者】中山和巳・阪上克弘(事業部会)

企画展のご案内

●徳川一門―将軍家をささえたひとびと―

会　期：１月２日(日)～３月６日(日)
会　場：常設展示室　５Ｆ企画展示室

催事のはがきによる申込方法

◆**普通はがき(63円)**に、①催事名(略名可)・開催日　②会員番号**(必須)**　③氏名(同伴者連記)　④電話番号を明記して下記の「友の会事務局」へ。
＊同伴者がいる場合は、その氏名、電話番号を連記する。
見学会の同伴者のみ保険の都合上、住所の明記も必要。

◆申込は、催事ごとに会員１人１通。
◆申込先：〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１
江戸東京博物館**「友の会事務局」**

＊「えどはくカルチャー」など江戸博への申込とは違います。
＊お申込いただきますと、「受講票参加票」をお送りします。当日ご持参のうえ、受付で登録、切り取り線下部のチェック表を提出してください。なお「受講票参加票」は逐次お送りするのではなく、申込締切数日後、一斉にお送りしますので、それまでお待ちください。
＊いずれも**申込多数の場合は抽選となることがあります。**
＊「受講票参加票」未着のお問合せや参加予定変更の連絡などはなるべく事務局員出勤の**火曜日か金曜日(11時～12時、13時～16時)**にお願いします。

インターネットによる催事の申し込み

「催事案内」ホームページ
https://sites.google.com/view/edotomosj2104b

◆「催事案内ホームページ」からのお申し込みをお勧めしています。はがきの必要がなく、参加票もwebで送られてきます。問い合わせも可能です。

会報＜えど友＞第124号
令和４年１月１日発行(奇数月１日発行)
編集・制作：江戸東京博物館友の会広報部会
E-Mail：edo_tomo_koho@yahoo.co.jp

発行人：待場　浩(会長)　編集長：中村貞子
福島信一、内匠屋京子、佐藤美代子、前田太門、菊池真一、光田憲雄、大橋弘依、田辺友紀子、横島利明、福田　徹、元沢　宏、秋元康良
発行：江戸東京博物館友の会
〒130-0015　東京都墨田区横網１－４－１　電話03-3626-9910